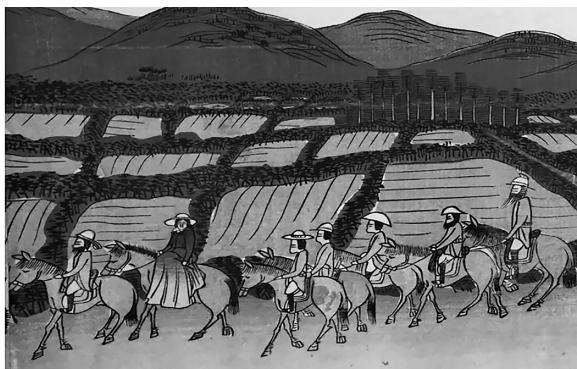


## 『イタリア伯爵 糸の町を往く 明治2年の上州 観察旅日記』

●著者：富澤秀機  
●発行：上毛新聞社



明治維新（1868年）が実現したとはいえ、廢藩置県が断行され中央集権体制が整い、眞の意味での諸改革が進んだのは、明治5（1872）年である。学制公布、徵兵令、地租改正が矢継ぎ早に実施され、新橋・横浜間に初の鉄道が敷かれ、

ていた。

幕末から明治初期にかけて、横浜在住の外国人は半径10里（40 km）

を越えて移動することを禁じられていた。異国、異人とは、これすなわち排斥すべきものだ、と頑迷に信じ込んでいた輩がまだ多くいたからで、関東地方の奥深くまで内陸旅行を許されたのは、これが初めてのケースだった。沿道の人々にとって、以来初めてだったに違いない。

ロングスカート姿の伯爵夫人が参加していたこともあり、どこに行つても人々的好奇心が集中し、黒山

官営富岡製糸場も建設されて、世界一の生糸輸出国（1909年）のへ向けて殖産体制も整つた。

それに先立つ明治2年。日本近代化の夜明け前とも言える時期に、

ドウ・ラ・トゥール駐日初代公使（伯爵）に率いられたイタリア人7人が、

北関東の養蚕地帯を視察するため、馬に跨つて中山道を北へ向かつた。

たのは、前橋藩17万石のサムライ

人で、宿舎となつた本陣には、急務の西洋式ベッドや椅子も準備され

ていた。

横浜を出てから5日目に、ようやく前橋に辿り着いた一行を出迎え

たのは、前橋藩17万石のサムライ

人で、宿舎となつた本陣には、急務

の西洋式ベッドや椅子も準備され

ていた。

幕末から明治初期にかけて、横浜

在住の外国人は半径10里（40 km）

を越えて移動することを禁じられ

ていた。異国、異人とは、これすな

わち排斥すべきものだ、と頑迷に信

じ込んでいた輩がまだ多くいたからで、関東地方の奥深くまで内陸旅

行を許されたのは、これが初めての

ケースだった。沿道の人々にとって、

以来初めてだったに違いない。

ロングスカート姿の伯爵夫人が参

加していたこともあり、どこに行つ

ても人々的好奇心が集中し、黒山

の群集に取り囲まれた。

一行は「総ての階級の人々の温和な性格、上品な物腰、思いやりは日本人の特徴だ」との印象を受け

ると共に、各地で示された「おもてなし」に感謝している。

到着の翌日には、町内の生糸工場を熱心に視察して回つた。伯爵らは

零細家内工業ながら、良質な生糸

を生産している様子に感嘆しつつも、

輸出によつて多くの外貨を稼ぐためには、器械製糸導入による大量生

産が不可欠だと実感した。

それも影響したのだろうか。翌明

治3年、前橋藩はスイス人技師C・

ミユーラーを雇い入れ、町内の細ヶ

沢に小規模な藩営前橋製糸所を設立した。2本の軸に6個ずつの糸枠

がつくイタリア式の双糸機械で、こ

れが日本最初の器械製糸場である。

日本政府も当時の最大の輸出品で

あつた生糸の大量生産によつて、富

国強兵の実現を目指し、2年後の

明治5年、富岡に官営製糸場を建設。

販路が米国に拡大されることもあつ

て、生糸は我が国輸出総額の60

70%を占め、昭和7年には最高を

記録した。後に「軍艦を購入せん

と欲せば多く生糸を産出すべし」

（松方正義蔵相）と言われたごとく、生糸は生産量の実に84%を輸出し、世界市場に占める割合は70%に達したのである。

ところで、2泊3日の前橋滞在を終えた伯爵らは、伊香保温泉で3日間馬を休ませた後、高崎藩（8万石）へ、さらに秩父を山越えて

無事21日間の旅を終えた。

この観察旅行に際して記録係を任されたのが、ピエトロ・サヴィオで

ある。彼が残した記録には、毎日

の行程を追つて各地の養蚕事情が詳

しく記述されている他、当時の日本

人の生活状況、各地の産物等が記

述され、翌年の1870年にミラノ

で刊行された。

本書はサヴィオの記録を基に、伯爵らがどんな行動を取つたのか、何

に関心を寄せたのか、また、初めて

見る西洋人を出迎えた日本人の驚

きや歓迎ぶり、当時の日本がどんな様子だったか、などを行程に沿つて記述。

一行の観察が翌3年の前橋藩によ

る日本最初の器械製糸所設置のイ

ンセンティヴとなり、さらに同5年の

政府による富岡製糸場の開設へと広

がついた経緯を明らかにしている。